

平成26年度新しい公共の場づくりのためのモデル事業

いわて文化支援ネットワーク通信

アシスト・なう

12号

発行日
平成27年3月15日

発行:特定非営利活動法人いわてアートサポートセンター / 印刷:杜陵高速印刷株式会社

前日から岩手県内は猛吹雪にまわれる中、東日本大震災から4年目を迎える3月11日(水)、盛岡市鉾屋町のもりおか町家物語館浜藤ホールを会場に「3・11文化復興フォーラム」が開催されました。

第一部は、NPO法人いわてアートサポートセンターが実施した文化芸術活動に関する市民意識調査の結果を坂田理事長が報告しました。調査対象は、県内の東日本大震災被災地に暮らす文化活動や地域活動の関係者、内陸避難者に送付し、沿岸被災地84人と盛岡に住む内陸

避難者50人から回答を得ました。設問は①祭り芸能の復活と今後 ②子どもたちの文化芸術体験 ③文化施設・生涯学習施設のあり方 ④文化復興における市民協働とNPOが果たす役割 ⑤地域文化・芸術 ⑥文化復興によるこれからの10年の6項目について。被災地の子どもたちの文化芸術体験については、69%が変化があったと回答しましたが、「支援により、生の表現に接す機会が増えた」との回答がある一方、仮設住宅からの移動時間により「学校での活動がしにくくなった」。

また震災前からの地域の課題を指摘する意見もありました。助成制度の活用について「情報がなく活用していない」「申請書を書く体力がない」「説明会会場が遠い」など、被災地のニーズを汲み取り支援制度につなげるためのコーディネートターの重要性が指摘されました。

文化復興によるこれからの10年について、地域基盤の強化と人口流出を憂う中での人材育成が強く求められる結果が報告されました。

3.11 文化復興フォーラム

～阪神大震災から20年
岩手の今後を考える～

第一部
「文化芸術活動に興味を持つ市民意識調査」報告
NPO 法人いわてアートサポートセンター
理事長 坂田 裕一



《来場者アンケートから》

尋ねなければ声にあまりあがってここの難しい「文化」に対する意識がよく表れていたと思います。表立たない声にならない声こそしっかりと支えられるべきで文化により生み出てる力を伝え広めていくことがもつと必要だと思います(40代女性)

調査内容もさることながら、このような調査をされたこと自体が有意義と思います。今後も質問内容を深めながら各種(文化に係る)調査を期待します(60代男性)

祭りや文化に特化した、又、沿岸部内陸部という調査で他にはないデータと思う。参考にしたい(50代男性)

被災地の課題と今後への期待

(文化芸術活動に興味を持つ市民意識調査結果から)

●被災地の課題

- ・生活基盤の整備は道半ば
- ・後継者難
- ・移動時間の長さ(交通)
- ・文化施設整備の遅れ
- ・文化芸術活動団体の弱体化
- ・助成事業等のコーディネート
- ・支援活動が継続されるか不安
- ・人口減少と高齢化の加速
- ・指導者・専門家不足
- ・無料慣れした公演

●今後への期待

- ・復興推進(住居・施設・就労)
- ・観光&文化で交流人口増へ
- ・若者定住への魅力あるまちへ
- ・指導者、専門家派遣へ
- ・交通網の整備
- ・自ら負担へ(緩和対策も必要)
- ・新施設や職員への期待
- ・資金支援の必要性
- ・中間NPO等への期待
- ・支援団体への継続支援も必要



「ダン活」ワークショップに参加して

公共ホール現代ダンス活性化事業(ダン活)とは、コンテンポラリーダンスのアーティストを市町村に派遣し、地域の公共ホールと共同でワークショップ等を企画・実施するという事業である。平成27年2月17日、大船渡市リアスホールで行われたこのワークショップ『からだdeコミュニケーション』に参加した。参加者は20名ほどで、小学生から50代ぐらいまでの年齢層が集まった。講師の坂本公成先生と森裕子先生の掛け声のもと、まずは素足になり、皆で

円を描いてあぐらをかいて座る。まず先生が「そのまま右足を伸ばして、右隣の人の左膝の上に乗せよう。」とおっしゃった。初対面の人の膝に素足を乗せることに戸惑いながら、皆それぞれ足に乗せる。すると先生の次の指示は「膝の上に乗っている隣の人の足を採んで。」：正直なところ、かなり躊躇した。しかし、そんな私の思いをよそに、先生は隣に座る高校生の素足を軽快に採みはじめた。それを見た他の参加者たちも少し遠慮がちに採み始め、私も慌ててそれに加わる。しだいに緊張がほぐれ、「もつと強く採んでいいですよ。」「人に採んでもらうと気持ちいいものだね。」といった声があちこちから漏れはじめた。参加者の表情も少しずつ柔らかくなっていく。その後は、体重をかけて他の人によりかかったり、2人1組で背中合わせになり、お互いの背中に体重をかけたまま歩き回ったり...といった、お互いのからの距離を縮める内容が続いた。あつという間の1時間30分で、すべて終わる頃には最初に感じた躊躇は消え、参加者同士が遠慮なく話し、笑いあえるようになっていた。

からだの距離を縮めることでこの距離も自然に縮まっていく、ということを実感したワークショップだった。『ダンス』『ワークショップ』と聞くと、運動が苦手な人や引つ込み思案な人は躊躇しがちだが、そんな人こそ、このワークショップを届けたいと感じた。(報告者・小笠原尚子)



第二部 パネルディスカッション 「3.11文化復興によるこれからの10年を考える」

【パネリスト】
外岡秀俊さん (ジャーナリスト・作家)
寺崎 巖さん (岩手フィルハーモニー・オーケストラ代表・音楽家)
福島史子さん (宮古市民文化会館館長補佐・元神戸アートビレッジセンター)
坂口奈央さん (元岩手めんこいテレビアナウンサー)

【コーディネーター】
坂田裕一 (NPO法人いわてアートサポートセンター理事長)



第二部は「3・11文化復興によるこれからの10年を考える」をテーマに、4人の登壇者によるパネルディスカッションが行われました。始めに、震災の被害を受けながら、昨年12月に再開した宮古市民文化会館スタッフとして着任した福島さんは、これまで神戸アートビレッジセンタースタッフとして、阪神大震災で傷ついた街の中で文化事業を進められてきた経験を振り返りました。坂口さんはマスコミの視点から、いち早く被災現場に立ち、レポートする報道スタッフの姿勢や、そこで目にした人々の行動について感じたこと。現在岩手県立大学大学院で学びながら取り組んでいる「復興学」について話されました。寺崎さんからは、自身が育った宮古市はかつて音楽の盛んな街であったエピソードを紹介し、そういった基盤があるからこそ、もう一度音楽の街を復活させることは夢ではないと、今後の文化復興の活動の展開に期待を寄せました。阪神大震災、東日本大震災の被災地を取材された外岡さんは、「災害で辛い経験をしても、そこから立ち上がるストーリーを紡げる人は、PTSD(心的外傷後ストレス)を発症しにくいという。そのストーリー作りに文化芸術の果たす役割があるのではないか。」

また第一部アンケートにも触れ、「今回のようなフォーラムが今後も継続され被災地の変化やニーズに合わせた支援のあり方を皆で議論することが重要」との意見を述べられました。



「心もからだもまるごと育てる表現ワークショップ」を開催しました

3月5日(木) 陸前高田市レインボーハウス
3月6日(金) 宮古市民文化会館多目的研修室
3月7日(土) 久慈市アンバーホール会議室

からだ全体を動かすことで心をとまほぐし、仲間とコミュニケーションをとる楽しさを味わう「表現あそび」を提唱するたじゅんさん(「風光舎」主宰)のワークショップが、岩手県内沿岸3カ所を会場に開催されました。様々な遊び道具を使いながら、あそ



びの大切さと呼びかけたワークショップには、保育士、幼稚園教諭や各地域の子育て支援者などが参加し、それぞれの現場や今後の活動に実践的に使える「表現あそび」を学びました。たじゅんさんは、伝承遊びをもとに考案した表現あそびを一つひとつ、その効果の解説を含めて紹介し、「二度とない子ども時代に豊かな遊びを。遊びは子どもが幸せに成長するためにある」と呼びかけました。たじゅんさんの巧みな話術に、終始笑いが起こり、参加者からは「すぐに活かせる話がたくさん聞けてよかったです。また参加したい」との声が聞かれました。

《来場者アンケートから》

それぞれのお立場からのご経験、貴重なお話をたくさん拝聴させていただきました。外岡さんのお話、お言葉一つひとつが心に深く響きました。二年前に拝聴した折、沿岸の「お祭り」についてもう少しお話を伺いたいと思っていたので、本日の鹿踊りのお話は大変印象深く拝聴させていただきました。心の復興、心の支援がもっとも難しく最後までもっとも深く必要とされると思うので、これからの5年10年、其の先の支援のあり方、社会の支え方が重要だと思います。(60代女性)

パネリストの方々それぞれが、それぞれの考え方で「人の生」に関わり考えられていることに佳き場に出会えた幸いと想います。(60代男性)

文化と多様性、地域が広い災害、それぞれの特徴を活かした活動に期待しています。坂口さんのお話、活動域のあり方に感銘。「ぶれない意識」。外岡さんの「復興をインフラで計らない」。「若者の力」(60代男性)

実体験に基づく有意義な話であった。人とのつながりをどのように作るのか、文化の果たす役割を感じることでできた(50代男性)

文化芸術活動相談について

いわて文化支援ネットワークは、【※岩手県文化芸術コーディネーター＝文化芸術鑑賞・活動のアドバイスを行うアドバイザー】として、沿岸広域圏の芸術活動の窓口となり、文化芸術活動に関するご相談を無料で承っています。経験豊かな芸術各分野のプロフェッショナルが相談に応じます。

例えばこんなサービスを提供できます!!

- イベント企画のアドバイス
- 活動場所の案内
- 新たに活動を開始したいと考えている人に対する同種の活動団体・活動の紹介、技術指導
- 鑑賞に関する支援（個人や学校等に対する芸術鑑賞の提案・仲介等）
- 支援者情報の提供（企業メセナその他の支援情報の収集・提供）

平成26年度4月～平成27年1月までで58人の方の相談を受けました。

いわて文化支援ネットワークまでお気軽にお問合せください。

※電話受付時間：平日13：00～19：00（土・日・祝日はお休みです）

※事務局員が席を外している場合もあります。予めご了承ください。

※事務室にいらっしゃる場合には、事前にお電話等で確認して下さるとスムーズです。

編集後記

かつて、一戸町出身の農民作家、故一条ふみさんは、国連国際婦人年（1975年）の報道を受けて「遠くで鳴る鐘のようにしか聞こえない」と発言し、大きな反響を呼びました。生活者との接点はどこにあるのか。岩手の農婦たちの代弁者としての思いがそこにはありました。法人主催フォーラムでジャーナリストの外岡秀俊さんは「内陸と沿

岸の意識の格差は、今後ほとんど広がっていくだろう」と発言されました。この3月、仙台市を主会場に「第3回国連防災世界会議」が開催されました。私たちの活動が「遠くで鳴る鐘」にならないよう。「その格差を埋めていくのが文化であり、コーディネーターが必要」との外岡さんの言葉に、文化支援は、まだこれからも継続させなければならぬと強く思いました。（U）

平成26年度版 「提言書～アンケートから見える文化復興の未来～」 を発行します!!

いわて文化支援ネットワークでは、これまで2冊の提言書を発行してきました。

平成26年度は、第一部にいわて文化支援ネットワークが行った市民意識調査の報告。第二部では、意識調査の報告から5人の執筆者による寄稿。第三部は、3月11日に開催された「3.11文化復興フォーラム」総括的分析としてのまとめ。以上3部構成で掲載しています。震災から4年目となる今回のテーマは「アンケート調査から見える文化復興の未来」です。関係各所に無料配布しますので、ご高覧ください。

いわて文化支援ネットワーク

〒020-0878 岩手県盛岡市肴町4-20永卯ビル3F
NPO法人いわてアートサポートセンター内
☎019-604-9020 FAX:019-604-9021
E-mail:kaze@iwate-arts.jp
http://ibsn.web.fc2.com/

●支援金振込先(振り込み手数料は負担願います)

■みずほ銀行 盛岡支店(普) 1190698*

■ゆうちょ銀行 店名【八三八】(普) 0808732*

※いずれも口座名:いわて文化支援ネットワーク

■岩手銀行 中ノ橋支店(普) 2044173

口座名:いわてアートサポートセンター文化支援 代表 坂田裕一

現在の支援金総額 **9,833,582**円 (平成27年3月10日現在)

ご支援、ご協力
ありがとうございます